



Gaze
at
the
World

卒業生にお聞きしました。

Q1: 私にとっての外语大 Q2: 『新生・

小菅 みさと

2001年ロシア語
●NHK国際放送局多言語展開部

A1: 「なぜロシア語を選んだのか——」卒業して10年以上経った今でも質問される。「ロシア文学に感銘を受けた」「ロシアの政治情勢に興味がある」、そんな答えができたらどんなに良いかと何度も思ってきた。実際の志望動機はというと、「ロシアは大国で、世界でロシア語を話す人も多く、就職のときに役に立つかもしれない……」こんなものである。しかし、そんな軽い気持ちで選んだロシアにとっぷり浸ってしまっている。現在NHKでロシアに向

けたロシア語放送を担当しているのだが、気がつけばロシアという専門分野を武器に道を切り開くことができている。東京外大の教育はそれだけ専門性が高く、自分の選択言語を将来のライフワークとすることも可能なのだ。これはまさに東京外大の持つ強みであり、魅力といえるだろう。

A2: 東京外大の卒業生には自由な国際人が多い。日本人としての誇りを持ちながらも、ステレオタイプな日本人像を打ち破る自由な発想と強い意志を持っている。さら

に彼らは皆、鋭い嗅覚を持っている。「これは危ない」「今がチャンス」、そんな嗅覚は日本国内であれ海外であれ、どんな場面でも求められる。そしてその嗅覚を身につけることができるのは学生時代なのではないかと思う。しかし時に外国語の知識というのは、変に自尊心を高め、壁を作ってしまうこともある。私自身、ロシア語が話せるというだけでどんな会社でもすぐに活躍できると思っていた。外国語というのは、あくまでツールであることも忘れてはいけない。

原 ゆかり

2009年中国語
●外務省

A1: 私の学生生活は、専攻語とゼミ活動、課外活動などでとても充実したものでした。外大には、言語のみならず、世界各地の歴史や文化、法律や国際関係など、幅広い分野の授業が揃っています。また留学生も多く、例えば、紛争後の平和構築について、アフガニスタンやスーダンからの留学生と意見交換をする機会にも恵まれました。卒業後の進路として外務省を選ぶに至っ

たのは、外大で出会った仲間や教授の影響が大きかったように思います。

A2: 夢や目標の実現のために、自らの頭で考え、動く学生の育成を期待します。新しい発見の連続の中で、仲間と切磋琢磨しながら、やりたいことを追求し、得意なことを伸ばせるような環境が外大にはあると思います。学生には、色彩豊かな教授陣や仲間から多くの刺激を得ながら、知識や経験を重ねてほしいと思います。新生・外大には、学生の主体性を尊重し、意欲を育むような大学であってほしいと願っています。

入江和生

1969年大学院修士課程ゲルマン系
●共立女子大学/共立女子短期大学学長

A1: 今から半世紀前に、外语大に入学しました。その際、当時の学生部長の教授が、「諸君は、オールAの成績を取ろうなどと馬鹿なことを考えてはいけません。大学はそんなところではない」と挨拶されました。私がこの教訓を、おそらく、学生部長の期待をはるかに上回るかたちで実践したことは確かです。私は柔道部と語劇サークルに所属し、それらの方面で猛烈に忙しく、あいまを縫って授業に出るような学生でした。ただ、家に帰ると毎日辞書を引きながらシェイクスピアを読み、それが「その後」につながることになりました。まったく論理的ではありませんが、「大学とはそのようなところだ」という思いが、私にはあります。

A2: 今日、大学は、単位の実質化、職業教育の実践などを厳しく求められており、かつてのようなだらかさが許されない時勢になっています。さらに、少子化のために大学間の競争が激化し、各大学は独自性を打ち出すためにしのぎを削っています。しかしながら、私は、大学とはどのようなところか、の答えを出すのは、大学ではなくて、学生一人ひとりであるとの思いを拭うことができません。その認識なしに制度や仕組みを変えても、うまくいかないように思います。私としては、かつての学生部長の教訓が、現在も外语大で引き継がれていることを祈るばかりです。

荒川 詔四

1968年インドシナ語
●ブリチストン取締役会長

A1: メジャー言語(欧米)ではなく、マイナー言語を選んだことで、結果的には、それまで生きてきた世界とは、大きく違った世界を発見し、また、自分の今まで積み上げてきたものをぐちゃぐちゃに壊されました。結果、自分自身の思考領域が拡張され、違う考えを受け入れ生かす工夫をする能力が醸成され、新たな能力を持つ自分が生まれたのだと思います。いわゆるDiversity(多様化)の重要性への理解力の醸成です。

A2: 外部から見ると、今までの1学部制は、実際の狙っているところと離れて、言語研究色があまりにも強く見えました。そのため、実社会では活躍の舞台が狭められている場面が多くあり、また、卒業生自身もこれを良しとするような風潮があったのではなかろうかと思えます。2学部制にし、外部にも意思をはっきりわかり易くすることで、実社会で活躍したい者にとってこの「縛り」が解けるきっかけになるのではと大いに期待しています。

田丸公美子

1972年イタリア語
●イタリア語会議通訳、エッセイスト

A1: 6才にして通訳を志した私は、当然のように外语大を目指しました。当時の外语大は国立二期校、倍率15-16倍の難関で、学生の8割は男子でした。私が選んだのは、希少価値のあるイタリア語です。幸運なことに、在学中、大阪万博があり、学生アルバイトの身で法外な日当をいただき、イタリア人団体の観光ガイドを始めました。その経験を生かし、卒業後はイタリア語の同時通訳として今日までフリーで生きてきました。米原万里さんと親友になれたのも、国際会議で一緒に仕事をしたからで、人生最大の役得(?)でした。私は、運よく、日本の急速な国際化と外国語が話せる人が少なかったという2つの追い風に

押されて順調にキャリアを重ねることができました。

A2: 「強制收容所みたい」とイタリア人の先生が酷評した旧西ヶ原校舎から、すっかりおしゃれに変身した母校。今回の学部改編で、教育内容も外観にふさわしく充実したようで、今後の後輩たちの活躍に期待が膨らみます。「はじめに言葉ありき」とヨハネ伝にあるように、言葉はすべての基本であり、それを使う民族の文化やメンタリティ、また世界観まで表すものです。真の国際人になるためには、まず自己のルーツとなる日本語を磨き、日本のことを知る必要があると思っています。外语大では、日本人の弱点である「話す」「聞く」を徹底的に訓練してほしいです。口頭試問、ディベートなどを取り入れるほか、通訳を養成する拠点としてもリーダー的な役割を果たすよう望んでいます。



東京外国語大学』に期待すること

井上正幸

1972年ウルドゥ語
●日本国際教育支援協会理事長

A1: 大学時代は社会や諸外国についての知的好奇心を開く大きな契機となった。東西交渉史、国際関係、経済、中東古代史、イスラム論、インドと英国の関係など幅広い分野である。外国旅行もたくさんした。百聞は一見に如かず。一つの言語を学ぶことはもう一つの別の世界を持つことにもつながる。

A2: 国際教養人、国際職業人を目指すことは言うは易く達成することは大事業である。今の世界はグローバル化や情報化の名の下において一体化が進んでいるが、他方各地域、文化、言語、社会などは自らのアイデンティティを主張している。大学の4年間でその両者の土台を体系として学ぶことは大変だが、言語文化、国際社会の両方において是非このような知的チャレンジに果敢に挑んでいくような学生になってほしいと育ててほしい。

田中一嘉

1991年大学院修士課程ゲルマン系
●群馬大学准教授

A1: 外国語習得の成否は学習の総量が大きく物を言うと思えます。手立てや方策を追いすぎず、できる限り多量かつ多種類の言語テキスト(音声・文字を問わず)にふれて、それにおぼれるくらいにひたってください。

A2: 外語大にしかできないことを果敢に追究してほしい。他大学にはない、言語そのものを深く追究するという姿勢を忘れることなく「グローバル化」と言われる現代でしたたかに生き残ってほしい。

中村 恵

1983年フランス語
●国連UNHCR協会

A1: 東京外大では、さまざまな言語や地域に対して、同じ尊敬の念と好奇心を持って接する「平等感」が養われました。それが、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) に勤務した10年間、さまざまな出身国の同僚たちとの出会いを楽しみ、難民問題が起きる地域の歴史や国際関係を深く理解しようと努める自分の姿勢の土台となっていたのではないかと思います。

A2: 東京外大には、日本だけでなく世界から一目置かれるような、言語と地域研究の教育拠点となしてほしいです。学生には、言葉を使って世界各地の人々と対話ができる力を養っていただきたいと思っています。

和田昌親

1971年スペイン語
●元日本経済新聞社常務取締役

A1: 高校生の頃から新聞記者になると決めていたので、語学よりもひたすら日本語の本を濫読していた気がする。新聞社に入社したのも「語学を生かす」という大それたことを考えたわけではない。ところが入社12年目に「事件」が起きた。「おい君、サンパウロ支局に行ってくれ」。人事異動の内示だ。ブラジルはポルトガル語だが、それに近いスペイン語ができる人間として選ばれたらしい。「スペイン語はほとんど忘れました」と言ってみたが後の祭り。実際「忘れた」と思っていたが、ある大事件の取材で頭の奥から記憶が蘇ってきた。1982年に勃発した「フォークランド戦争(英国とアルゼンチンの領土紛争)」である。プエノスアイレスでは英語は敵国語なので記者発表はすべてスペイン

桜井哲夫

1973年フランス語
●東京経済大学教授

A1: 1968年3月に東大の二次試験に失敗、予備校に通った。ところが翌年の東大入試は、安田講堂の攻防戦の後、中止と決まった。あれこれあったのだが、結局、当時愛読していたポール・ニザン『アデン・アラビア』の記者だった篠田浩一郎先生のおられた外語大のフランス語科に入学することにした。私の外語大時代の前半は、学内での激論と学外でのデモの時代であ

った。これが不思議にわかるようになったのである。仕事だからと必死になったこともあるが、文法を比較的きちんと覚えていたことが「復活劇」につながったかなと思う。

A2: 日本は明治維新、太平洋戦争の敗戦に続き、3・11東日本大震災という「第三の国づくりの転機」に立つ。震災復興というハンディを背負って世界の中での存在感を取り戻すには、グローバル人材を育てる必要がある。その意味では今回の学部改編は絶好のタイミングだ。2学部共通の世界教養プログラムで外交やビジネスのための「人間力」や「交渉力」も備わるはずである。東京外語大の役割は「語学も留学も海外駐在も当たり前」と考える外向き・上向きの若者人材を発掘し教育すること。日本には「国際」と名のつく学部を持つ大学がワンサカとある。そういう中でも全世界、各地域をくまなくカバーする大学は東京外語大しかない。

った。しかし、今考えてみると、外語大時代の最大の幸運は、すぐれた先生たちに出会えたことだと思っている。恩師の篠田浩一郎先生、歴史学の二宮宏之先生、社会経済史、思想史の山之内靖先生らとの出会いは、決定的だった。当時国際基督教大学におられた丸山圭三郎先生との出会いもあった。モンゴル語科には、社会言語学者として著名になった田中克彦先生もおられた。その後東大の大学院に入り、研究者となったのも、こうした先生方から受けた知的刺激が大きかったように思う。

中嶋嶺雄

1960年中国語
●国際教養大学理事長・学長

A1: 卒業時には、東京外大に対する不満で、二度とこの大学の門はくぐるまいと思っていました。運命のめぐり合わせで母校の教員となり、学長も務めることになりました。大学の3、4年次は学生運動に明け暮れており、就職活動は一切せずに、研究所から大学院へと進みました。深刻な学生紛争で体験した人間模様が社会に出て役立ちました。

A2: 外国語のコミュニケーション能力に秀で、国際教養を身につけたグローバル人材の養成が東京外大の使命であり役割です。それには、教職員意識と体質がグローバル化を見つめて抜本的に改革されなければなりません。米国の民主政やヨーロッパ近代の遺産、それに日本の伝統や文化を軽々に否定するような教員集団が多いとすれば、東京外大の未来は厳しいと思います。亀山学長のリーダーシップで東京外大が新生することに期待します。

A2: 外語大の少人数教育には感謝している。入学当初からの学生と教員との相互関係の深さは、ほかの大学では得られなかっただろう。こうした伝統は存続してほしいものだ。だがその一方で、外語大の学生の多くは、あの騒乱の当時にさえ社会的・政治的問題に対して無関心だったように思う。かつて、専門バカという言葉があった。語学習得に熱意を持つのはいいのだが、それ以外のことに無関心ではいけないはずである。新しい学部が生まれるのもそうした時代の要請なのだろう。

